

低學年兒童と其陶冶の一斑

女高師附屬小學校 澁谷義夫

一、低學年の兒童の心身、

低學年とは如何なる範圍を云ふか此の範圍を限定してかゝらないと問題にはならぬ。若きものゝ發達の段階を諸種に分けることは小兒科醫、小兒科精神病醫の通例よく爲せる所であるが教育の實際家に於ては或は此を初學年だけに限るべきであると云ひ或は尋常二年まで取り入るべしと云ふ。然しながら其根據は何處にありやと問はるゝならば經驗的に漠然と分けたのみであると云ふに止まるものゝ多いのを残念と考へる。中には英、米、獨の著書には幼稚園と尋常一年とを同じにして論じたものがあり、學校最初の學年なる書物もあつて、低學年なるものを尋一のみとせるものもあり、尋常二年も入れて居るものもあると云ふ譯で、餘りに明確に對稱たる兒童について論じ過ぎて居る。此等の説とは離れて尙少し吾々は兒童研究其者より出發して低學年の範圍を明かにすることを必要とするものである。今暫く小兒科精神病學等の書物に記載されたるものを見やう。それには小兒期として滿一歳乃至四歳を取つて居る。而して吾々の云ふ幼兒期及び兒童期を一括して潜伏期とし、五歳より思春期迄として居る。此の思

春期と云ふのを十五六歳頃として居る。然るに児童學の方面では諸種の説もあるが大體生後より満三歳の頃までも嬰兒期満四歳より満七歳乃至八歳頃までを幼兒期、八九歳の頃から十二歳の頃までを兒童期十三、十四歳の頃を前青年期、十五六歳以降成人に至るまでを青年期として居る如く取つて支障ない。且つてハルトマンは非常に機械的な分類をした。それは次の表の如くである。

一、受納の時期 生後から満三歳まで。

二、再生の時期 四歳から六歳まで。

三、自由想像の時代 七歳から八歳まで。

四、機械的記憶の時代 九歳より十歳まで。

五、理解の時期 十一歳より十二歳まで

六、道徳的生活の時代 十三歳より十四歳まで。

と云ふ如き區別をして居るが此は餘りに約説の原理即ち個體發生は種の發生を繰返へすとの原理に従ひ過ぎて兒童の教育に拘り丈規的にあてはめんと心得たものである。

吾人は前き上げた標準も多數の子供について永い間研究の結果出て來た大凡の目安であつて、かゝる具體的の子供のあることを認めるものではない。吾人は大體の目標を出來得る限り確實な根底によりて打立てんとするものであるから敢て此を取つて來たのである。然し精神病小兒科に關する書物にも出

て居る如き大體の區別よりも尙兒童學に於ける區別の方が吾人實際家の眼より見て適當と考ふるのである。勿論小兒期として一歳より四歳の頃までを認めて居るが其後を單に潜伏期として一括することは兒童の精神發達に即することが少くは無いかと考へしめられる。吾人は敢て兒童學者の分類せることを目安として論を進め、實際的取扱の便に供し度い。

前記の如く嬰兒、幼兒、兒童と云ふ風に區別せられ取扱はれることには相當根據のある事と考へる。フインドレイの學校論を見ても其他の兒童精神發達に關する書物を見ても、幼兒期の終りに於て大脳の發達が或る程度まで完成されると云ふ事である。勿論大脳の完成されるのは約三十五歳の頃と云はれて居るが此の幼兒期には非常な速度を以て發達すると云ふ事である。其著しき發達を生得の經驗の大約の範圍からして幼兒期を四歳の頃から七歳乃至八歳の頃と推定せる論には吾人の傾聽に値ひする所である。

故に幼稚園に於ける幼兒と小學校へ來れる一二年生とは其發達の程度は違ふが發達の傾向を同ふするものであるが故に同じく幼兒の中に入れて支間は更にならないものと推定してよい。故に吾々は低學年兒童とは小學校に入學せる幼兒期兒童を云ふと規定してよいと考へる。

従つて其取扱の方法は此の時代に於ける兒童の精神發達に即すべきものと考へる。此の時代の精神活動の特色として普通上げられて居るものを列擧すれば、想像活動の特に盛な事、好奇心の強い事、遊戯

活動の盛んな事等がある。

殊に此の時代は遊戯の時代だとさへされて居る。彼等は遊戯せることが生活なのであつて娛樂の目的で遊戯するのではない。遊戯が眞剣な生活なのである。彼等の目に觸れ耳に聞くもの悉く遊戯の材料となるのであつて遊戯によつて生活上必要な行動を學んで行くのである。吾々は先づ此の遊戯活動を利用して彼等の心的内容を豊富にし經驗を豊かにしてやるべきものであると考へる。

此の時代にある子供が何事も無心に遊ぶことに依つて得るのである。遊ぶ事に依つて子供は道德的觀念を得て行くのであつて知識も又大に開發される。此の時代の子供の最もよく好む遊戯は大人の模倣することであつて座敷を掃いたり、板の間を拭き、新聞を讀み書物を讀むことである。其模倣の仕方が眞に迫り、細を穿つて見るとは驚かされる。斯くの如き遊戯の衝動に依つて兒童の注意と思考とが鍛練されてゆくのである。木の端、板の片などを積上げては幾何學的形態に關する思想を練り、銜平の原理を學び、好奇の心よりして玩具を壞して、其出來具合を見やうとする。

此の時代の子供の遊戯に競争的のものを加ふれば兒童の思想は鋭敏となり且つ賢しくなるのである。此の遊戯によつて常に培はれ、活潑に働かされるものは想像力である。見よ人形も椅子も、花も、皆自分と同様に生きたものと看なし、自からは賢者となり或は教師となり、國王となり馬となり、盜賊となつて遊ぶ。兒童は事實に對する經驗が少ない爲に彼等の思想は想像となつて飛躍し自由の天地を驅

けて、新らしき力を得る。「己れを組織する原理はやがて己を亡ぼす原理なり」とは先哲の述ぶ所であるがこれが如實に低學年の子供の遊戯生活、想像の世界に働いて居るものを見るのである。此を尙少しく詳かに述べて此の間に想像力、遊戯を利用せねばならぬ事を明かにしたい。

二、想像生活が想像を破壊する

「己れを組織する原理はやがて己れを亡ぼす原理なり」とは如何。先づ此れより鮮かにして行かう。紋白蝶の玉子はそれ自體に内在的に有する力よりして春の暖かき光を浴すれば孵化して青虫とはなるであらう。青虫となれる限りは菜の葉、若芽を食ひて自らを太らし、己れの體を養ひ蛹にならんと努めるを見るであらう。青虫は努力の結果蝶となるものである。蛹となれる青虫は生命の努力する結果蝶となるであらう。蝶は種の播殖の爲めに雌は雄を求め雄は雌を求め扁々と花の野原を飛びかふのである。かうして自己を満足させんが爲めに、より生命を發達せしめんために卵を生み、體を勞する。かくして彼は遂に己れを亡ぼすのである。玉子は生命を満足せんとして永い間努力して來た。其努力によつて青虫となり蛹となり蝶とはなつて來た。彼等は此の種の播殖を目的として營々として働くのであつたが、此の己れを組織し發達せしめて來た原理に従ひ、遂に己を亡ぼしたのである。

兒童の想像活動に付いても此れと同様の事が云はれる。彼等の腦には想像の中樞が發達して來た。此の發達せる機關を完全にせんが爲めに好んで前述の如き遊戯を爲し好んで御伽噺の世界に入る。かうす

ることによつて兒童は自己の心意の内容を増し、思考する力を得て行く。其結果、彼等は想像と現實との區別を爲し得る能力を得るに到り彼等は其想像を想像なりと認めて行くのであつて、想像力よりて想像を破壊し亡ぼして行く。此の事實を眺めて行けば低學年兒童に於ては充分に想像活動を爲さしめんが爲めにお話を聞かせ、遊戯を爲さしめ其心意の力を練る様に仕向けて行く可きものではないかと考へる。彼等の抱く好奇心であつたとてさうである。それが充分なる活動を企てしならばやがては姿を變へた研究心となつて現はれものである。故に低學年の兒童に教師が唯社會の仕來りのまゝを爲すことが果して適當なりや否や大に考へさせられるのではないか？一つの型に捉はれ此の生動する幼兒の生活を完全に行はしめる所に眞の價値が生れ出で、更に進んだ生活を爲し得る根底が養はれるものである。

三、低學年兒童の注意力と其養成法

此の時代の子供の身體上の特質として身體の容積に比して心臓の小さなことである。尙一つは消化機系統の割合に薄弱な點である。此の心臓が身體に比して大きくなつて居ないと云ふことに原因があるのであるか、又は他に原因のあることかそれは明瞭に述べ得ぬが此等に關係して彼等の努力が永くつゞかぬこと並に注意力の持續の困難な事である。彼等が興味を持ち面白がつてやる遊戯も物の一時間と續くものではない。二十分も經つか經たぬに疲労し倦怠を來たす。子供子供によつて注意集中の持續時間は違ふのであるから正確に幾十分と云ふことは云へぬ。且又外界の様子即天候、氣候に依つても違つて來

るから精細には云ひ得ぬが子供の疲勞に依つて現はす特徴を精細に知ることを要する。學校に入學したばかりの子供の注意集中の持續時限は千態萬様個人個人にて違ふから其の疲勞の特徴を明かに知ることが低學年受持ち教師の心得べき事であらう。よく兒童を檢査して見ると一つの事を數分間やつて居る子供は此の上新しい印象を受けることが出來ず又しきりに外を見ることがある。此の様な子供に對していくら注意したとて聞くものではない。其子供が更に最初の仕事に對してどんな現象を呈するかを見れば注意散漫の結果隣席の子供に話をしかける、情氣を催し欠伸する、重苦しい様な態度を示す。仕事を放げ出して仕舞ひ道具に注意しなくなる、先生の云ふことに服従しなくなる、我儘となり強情となる。疲勞の結果示す惡傾向を目してあの子は性質が悪い等と叱かるとか、何かを命ずるが如きは教育的ではない。以上の傾向の一つ乃至二つが現はれたならば吾々は子供をして何か別の仕事を爲さしめ、筋肉を勞せしめて腦細胞の働きを轉換せしめる様にすることが必要である。手足を働かしては又頭を使ひ、注意すると云ふ様な仕事、即ち作業は子供の注意力を養ふ一つの企てである。

四、記憶力の養成

兒童の記憶は最初は受動的のものであつて、眼、耳、觸等の感官を通じて入つて來た印象を幾度も幾度も繰返して神經細胞に一定の系列を與へる、そして前と同じ印象なり類似の事件がある場合には、曩に感得した記憶を喚起する。此の事は話すことを學び得るに到りて漸く能動的となり獨立した理性の一現

象たる記憶となる。この記憶を得る第一の條件は有意的注意の或る事柄に加はることを要する。即ち覺へやうとする意志とそれがどんな事であるかを知らんとする専心の状態にあることを要する。

記憶力の發達は注意能力の發達と相應するものである。故に注意する力を養成せねば記憶は發達するものではない。兒童は未だ人生の經驗の少ないものである。其故に新しい印象に對しては却々忘れるものでない。然しながら記憶と云つても諸種の方向のあるものであるから其方向をなるべく偏せぬ様働かすことが必要である。記憶の方向と云ふのは、眼から入つた印象の記憶、耳から入つた印象の記憶、觸感覺から入つた記憶等種々ある。中には運動から入つた記憶もあらう。此等の各方向から受け入れて同時に認識し得る印象の數は大體六以下のものとなつて居るが其記憶の永續性はそれだけ相違して居る。又性別に依つても記憶する方向が違ふ、普通女兒にあつては人をよく記憶し人に關係つけて事物を覺へるが男兒は事件を多く記憶することを容易とする傾向がある。然しながら其天稟と環境によりそれぞれ方向を異にするものあることは實際家のよく知れる所であらふ。然し此等の調和的發達を企てることは吾人の忘れてはならぬ所であらふ。此の時代の子供は自由に遊ばせ、自己の觀察と經驗とを豊富にせしめ教育の目的たる事物に兒童の注意を誘ひ、見たこと聞いたこと、經驗せる事を語らせ必要に應じて其子供のを爲せる誤謬の訂正を爲すことを要する。教へなければならぬ、聞かさなければならぬと云ふ態度に余り強く出すぎると子供をして壓迫することになり反抗心を高めることとなる。

兒童の發達は自然である。兒童は家庭に於ては身の周りにある器具用品を覺へる。それから近所の人、友人、と近きものより遠きものを漸次求めて行く。野外に行つては著しく知見を擴めるがそれは子供の注意の性質よりして萬偏なく見るを得ざらしむ。故に野外に出るにしても同じ所を何回も歩くことを好み、知見を擴げそれを記憶せんと努むるに到るものである。兒童は庭や畑や野原や、山や川や他などを、見て正しい觀念を得るのであり樹木や鳥や虫や魚についての觀察を爲して記憶するのである。前には大人の話や繪本で見て居たり聞いた事によつて誤つた觀念を持つて居たが、今は自然に接し微妙不思議の觀念と正確なる知識を得るに到るのである。戶外に出て自轉車、人力車、汽車、電車等の交通機關を知り、隣家に到り或は町や、村に出て人間と自然との關係を目撃し、人々の相互關係を知るに到る。田を打つ農夫、路を急ぐ郵便配達夫、巡查等一定の職を守る人に接して人間界の職業なる觀念を抱くものである。此の様にして子供の記憶に止まる觀念の具體的なることが子供の記憶に生命づけることとなるものである。

五、思考力は如何にするか

思考力は兒童自からの力によつて發達せしむべきものである。どれだけ教へられたとて仲々發達するものではない。考へて見る必要があるならば子供は思考するものではない。故に低學年の子供には考へることを要する場合の提供を企てなければならぬ。知覺は生れた時から存する。然しながら思考

なるものは知覺それ自體には加はつて居るものではない。即ち子供は事物を知覺するが認識することはせぬ。此の知覺より概念を作るには思考力が必要である。而して此の概念は言語によつて形成さるゝことが多い。兒童は質問によつて事物の根本を明かにし、言語に依つて抽象的な概念を組立てるのである。

子供は自分の考へたことや、見たことや、感じたことを物語る間に、比較したり區別したりする能力を得、人の話を聞いて觀念を覺へるものである。兒童相互の對話、先生と兒童の對話は實に兒童に精神の糧を與へて居るものなのである。其對話が子供の主張と密接に關係して居て、御伽噺的でないならばその對話は兒童の推理力を増進し、知識の確固たる基礎を造るものと云ふべきである。故に此の對話に於て正確な言語を用ふることは兒童の理解力を増進し、それを鍊磨し、精密ならしめるものである。故に低學年では二種の御話即想像力に訴へるものと、彼等の實情、經驗に關するものとの二つのものを組合はせて課することが正當である。

數の觀念を教ふるにしても自分の口、耳、眼、四肢、指等の具體的のものから出發し、その數を教へて行くことが自然である。かくして數の考へが出来たら量の測定を爲さしむべきである。其分量の比較に數を用ひたらより正確になるものと云ふことを授るを得るであらう。

それが終れば時間の觀念を抱かしめるがよい。夜と晝、夜明けと夕暮れについて述べしめ、一日は午

前と午後、朝と晩、等に分かつことを子供のやる行動に關係つけ、其時々現象を示して了解せしむべきである。昨日、今日、明日と云ふ様な觀念も、子供の經驗を主體として覺らすべきものであらう。

兒童と對話したり遊んで居る間に周圍の事物に兒童の注意を促し、觀察力を練磨せしめ、考へさす様な質間を爲すことは子供の思考力を練磨せしめる方法として適當なものであらう。然し此等の事が度を越して兒童の精神を煩雜ならしめる様な程度になつては却つて有害である。此の様に兒童の中から發する力を基礎として諸種の方面の陶冶を企つることが極めて必要である。

六、研究すべき新方向

以上は何人も一應は考へる問題に對する兒童の心狀を簡單に述べたものである。決して新しい方向と云ふことは出來ぬ、然しながら次に述べる問題は吾人低學年の教育に興味を持つものの心得べき問題なるのみならず幼稚園は元より高學年の兒童を預かれる人にも又考慮すべき大問題である。然しながら一生の人格の要素となるべき諸種の陶冶の企てらるゝ低學年の教育には殊に痛切なる意義と要求を持てる問題が存する。それは何かと云へば近代の精神兒科學の齎らした事項の一つなのである。即ち低學年兒童の精神衛生の問題である。此の精神衛生の問題は從來餘り注意はされて來なかつた。然しながら家庭にあつて比較的自由的な全能の生活をして來た小供を多數集めて、陶冶するに當つては當然此の問題が起つて來る。かう云へば一體精神衛生とは一體何を云ふかとの質問が起るであらう。此の精神衛生なる語

の意味する所を明かにし低學年に於て如何に爲すべきかを明らかにして行き度いと思ふ。

兒童は家庭に於ては本能を充分に働かせて居た。願望とか慾望は比較的によく満足させられて來た。然しながら兒童が成長するに従つて本能的慾望は自己の微弱な力で満足せねばならず多數の自分と同じやうな個人が居て、自分の思ふことが充分に達せられぬことが多々あるであらう。又友人をつくるにしても、其友人が他に友人を作つて自分とはあまりよく遊ばないと云ふ様なことも自然の中には存することである。其他兒童の要求、願望と一致せぬ諸種の事項が學校社會には存する。此の慾求が自己保存の本能とか廣義に云ふ種族保存の本能とか云ふ如き根深きものに端を發して居るとすれば、その子供の精神は偏倚せざるを得ぬ。偏倚せる精神はやがて子供の精神的疾患となり社會的に或は個人的に不幸なる存在者となるに到るものである。此の偏倚はなほする必要の無いものであらうか？

其他どんな良家の子弟にも皆一種の癖のある子供が多い。其癖の中には人をいぢめて喜ぶとか、よく泣くとか諸種の特性を示すものがある。此等はその子供の性癖として其儘放任してよいのであらうか？兒童の惡癖として社會的に入れられぬもの多くは無意識の状態にある凝結概念の爲せる仕事であることを精神病學並に精神分析の方面で説いて居る。此の故障となる概念が深在せる爲め怠惰となり虚言をつくのである。此が撤回除去を企つることこれが即ち精神衛生の問題である。丸井清泰氏はこれを「兒童精神の衛生、兒童教育の本分は個人の能力の完全なる發展を爲さしめ、個人發達の可能性を害する本能

の不都合なる支配より個人を解放し、善良健全なる造建的傾向を自由に發達せしむることに存するなり」とされて居る。

さて低學年に於ける精神衛生として心得べきことはどんなことかと具體的に見極めをつけて論議することは今回は時間の關係上出来ない。然しながら教育に壓迫的方面、即ち鍛練的方面と開發的方面、即ち衛生の方面とあることを知らば自づから爲すべき分野が理るであらう。壓迫的方面は從來より完全に用ひられて居るがさて衛生的開發的方面になると往々にして忽かせにされ勝ちである。泣く癖がある、虚言癖があると云ふのはその様な性質があるのでなく深く腦裏に無意識に存する度重なつて出來た凝結概念の仕業なのである、此を如何にして昇華せしめ開發さすかの問題は又の機會に譲られ度い。